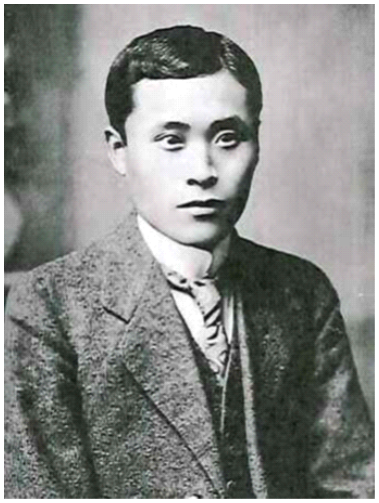
無私の情熱～モヨロ貝塚を世界へ発信～

米村　喜男衛

「これは、今までの土器とは違う。」

一九一三年九月四日の早朝、網走川の左岸で米村喜男衛が見つけた一片の土器。アイヌ文化とは異なる独自の文化をもつ*モヨロ人とオホーツク文化の存在は、喜男衛によるモヨロ貝塚の発見から始まったのです。



〔「北辺の海の民　モヨロ貝塚」より〕

米村喜男衛は、一八九二年、青森県の農家の長男として生まれました。幼い頃の喜男衛は、一人でこつこつ何かを拾い集め、もの静かに遊ぶ子どもでした。

尋常小学校三年生の時、畑で偶然見つけた尖った石ころが、大昔の人が使用していた刃物である可能性があるということを知り、喜男衛は石器の魅力に引き込まれていきました。

喜男衛は十二歳の時、家の経済的な理由で働くことになりました。当初、父から理容師としての働き口を紹介されましたが、理容師の身なりが好きではない喜男衛は、「床屋はいやだ。」と断っていました。

しかし、

「床屋の姿の何が恥ずかしいことがある。お人の役に立つ、立派な職業ではありませんか。人の値打ちは、姿や形で決まるものではありません。それを決めるのは、その人のもつよい趣味や教養です。お人の役に立つのが何より大事なことなのです。」という祖母の言葉を受け、理容師としての道を決断します。

喜男衛は東京で理容師として腕を磨く一方、考古学へのあこがれをずっと抱いていました。東京での生活を続ける中、喜男衛は、東京大学人類学教室の鳥居龍蔵先生の知遇を得て、日本人類学会に入会することができました。考古学の勉強に懸命に励む中で、アイヌ文化に直接触れてみたいという強い気持ちから、二十歳の時、北海道に渡り、網走の地に行き着くことになります。

二十一歳の時、網走駅前の宿に泊まった翌朝、散歩をしていると、大きな川のそばに貝殻が堆積しているのに気付

きました。草むらをかき分けて近づくと、貝殻に混じって、土器、石器、動物の骨などが埋まっています。喜男衛はひとかけらの土器を手にして、「これは、今までの土器とは違う。縄文式でも、弥生式でもない。こんなことってあるだろうか。」と、つぶやきました。驚いたのはそれだけではありません。砂丘をよじのぼると、無数の穴が目に飛び込んできました。それは、竪穴式の住居跡です。喜男衛は目を見張り、決心します。

「この網走の貝塚を本気で研究したい。」

理髪店を営みつつ、毎朝彼は、貝塚へ足を運びます。

「おはよう、米村さん。どちらへ？」

「ちょっと、恋人に会いにね。」

貝塚に出かけ、朝は土器や石器をこつこつ集め、日中は床屋、夜は考古学の勉強です。

「あんな役に立たないものを集めてどうするのかね。」

〔バーバーショップヨネムラ　「北辺の海の民　モヨロ貝塚」より〕

と失笑する人もいましたが、喜男衛は貝塚の研究に没頭しました。

喜男衛の網走での日々は、土器集めと床屋だけではありません。月に三回は、理髪店に通う子どもや研修生を集めて理容研修会を開き、その技術を伝えました。

さらに、理容研修会で学んだ研修生を中心に、「網走救護団」を結成し、災害に備える町づくりに懸命に取り組みました。

また、「網走史さん会」や「すずらん童話会」を結成して、貝塚やアイヌ民族についての学習会を開き、その素晴らしさを多くの人たちに伝える活動を積極的に行いました。そして、貝塚が荒らされるのを防ぐために、国の法律で保護できるよう、十三年間に渡って国に働きかけ続けました。

喜男衛のこうした行動は、いつしか町の人たちの心を変えていったのです。

貝塚からの出土品は理髪店の二階部分を埋めてしまうほどになりました。彼は、博物館の建設を思い立ちましたが、建築費用は莫大です。喜男衛は寄付集めに奔走し、その熱意が、四つの会社と周辺の市町村、地域住民を動かし、足

りない分は自らの財産で補うことで、一九三六年、北見郷土館（現在の網走市立郷土博物館）が完成し、喜男衛が集めた三千の出土品が並べられました。美しい建物を見て喜男衛の目には光るものが輝いていました。

一九四一年五月の初め、モヨロ貝塚の一部に軍の施設をつくることになりました。当時は戦争中であり、軍に意見を述べることは大変な覚悟が必要でしたが、喜男衛の懸命な訴えにより、貝塚の大部分は残されることになり、喜男衛には、いつでも貝塚を発掘することが許可されたのです。

〔設立当時の網走郷土博物館　「北辺の海の民　モヨロ貝塚」より〕

この時、これまでに発見されたものとは全く異なる特徴をもった人骨が発見されたのです。その人骨は、モヨロ人と名付けられました。

一九四五年、終戦を迎え、日本中が飢えていた時代に、貝塚の発掘調査が再開されることになりました。ところが、調査団の食糧が確保できないという問題が起こりました。そうした喜男衛たちを救ったのは地域住民です。農家や漁師が食料を提供し、滞在費の一部は地元住民が工面してくれたのです。

さらに、自分たちの生活だけで精一杯のはずの学生や住民が進んで発掘調査に参加したのです。やせた体で夏草を刈り取り、土を深く掘って竪穴式住居を発掘しました。辛い作業のはずでしたが、彼らの顔は喜びに満ちあふれていました。

遺跡は連日の新発見に沸き、ついにこれまで知られていなかったオホーツク文化の存在が明らかになったのです。

博物館長の喜男衛は、こうした功績を評価されて、一九五二年、ユネスコ主催の第二回国際博物館会議に日本代表として出席しました。さらに文部大臣表彰や北海道文化賞など数え切れないほどの表彰を受けました。

それでもなお、網走の博物館を訪れる人々へ、出土品を丁寧に説明する喜男衛の姿が見られました。喜男衛は、老若男女に関係なく、子どもにも大人と同じ思いで話しかけます。自分の興味をもったもの、自分が感動したものを素

直に取り出して見せる喜男衛の話に、小さい子どもたちも聞き入ったといいます。

喜男衛は、一九八一年、八十八歳の生涯を閉じました。晩年にこんなエピソードがあります。博物館の坂を下りたところに銭湯がありました。客の一人が、「ひげが上手くそれない。」と、ぶつぶつ言っていると、「私がやりましょう。」と頼まれもしないのに、他人のひげを見事にそり上げ、喜ばれると「そりゃあ、本職だから。」と笑っていたといいます。

「…お人の役に立つことが何より大事なことなのです。」

喜男衛は祖母の言葉を生涯忘れることなく、「お人の役に立つように、郷土の発展のために。」という思いを貫き通したのです。

〔当時の発掘作業の写真「北辺の海の民　モヨロ貝塚」より〕

一八九二	青森県で農家の子として生まれる
一九一三	網走市に移住する（三十一歳）
一九一八	網走の貝塚を「モヨロ貝塚」と名付ける（三十六歳）
一九三六	北見郷土館（現網走市立郷土博物館）を設立する（四十四歳）
一九五二	第二回国際博物館会議に日本代表として出席する（六十歳）
一九五三	北海道文化賞を受賞する（六十一歳）
一九六〇	網走市名誉市民称号を受賞する（六十八歳）
一九七三	北海道開発功労賞を受賞する（八十一歳）
一九八一	網走で死去する（八十八歳）

＊モヨロ人とオホーツク文化…アムール川下流域の文化が五～一二世紀にかけておもに北海道オホーツク海岸に展開した。この漁労・海獣狩猟の文化をオホーツク文化といい、モヨロ貝塚の担い手をモヨロ人と呼ぶ。